



世田谷区誌研究会 会報

令和8年1月号

NO58

編集人 野岸敏雄
天海敏彦

連絡先：kushiken0817@yahoo.co.jp

ホームページ：<https://setagaya-kushiken.jimdofree.com/>

世田谷区誌研究会 令和8年 年頭のご挨拶

会員の皆さまへ

新しい年を迎えるにあたり、心よりご挨拶申し上げます。

さて、令和8年を迎えるに辺り従来の活動の延長でなく新しい活動で世田谷区誌研究会を活性化したく令和8年度の企画についてご説明申し上げます。

従来の活動を支持くださっている方には不満があるかと思いますが是非ご理解いただきご支援ください。

設立の歴史

世田谷区誌研究会は、昭和25年戦後の荒廃した時代に「貴重な郷土資料を守り、研究し、次世代に繋げたい」という強い思いのもとに旧家の大場信統氏を会長に教育者など10人もみたいな人々によって設立されました。ボロ市の歴史など現在公表される資料の原点になる発表や世田谷の旧家である大場家・臼井家などの古文書の解読などを機関誌「せたかい」に毎年発表する学術的な会とし小人数の会として活動していました。

高齢者のサークル活動の場

その後、郷土資料館が設立され地域資産の保護・活用など区の施策に当会も連携しながら活動し、区の職員も役員として参加されました。昭和52年に世田谷区は高齢者の生涯教育の場として老人大学が設立されました。その講師に会の役員が教鞭をとると多くの在校生・卒業生が学びの場として世田谷区誌研究会に参加されました。年4回の講演会、春秋の史跡めぐり、バスによる史跡見学などサークル的で温かい運営は、老人大学が生涯大学に名を変え団塊の世代が入学する時期には数百人の会員を有する団体へと変化し設立時の学びの意味合いも「深く」から「広く」と変化してまいりました。

手書きの投稿がワードが当たり前になるパソコン・SNSの発達には社会に多くの影響を与えました。マスメディアの衰退は新聞社が発行部数を部数を急激に減らし、週刊誌・月刊誌・同時誌の廃刊など出版不況やテレビの視聴率の低下に反し、SNSの発達は情報の多様な発信となりスマホひとつで図書館などで調べなくとも瞬時に解決され、個人の発表の場は雑誌でなくブログなどで広く拡散される時代となりました。当会の「せたかい」も投稿の減少も有り平成30年に70号で毎年の発行が止まりました。趣味の多様化、定年延長や団塊世代以降の人口減など新規会員が増えない状況となりました。この状況で役員各位はバス見学会を中心に活動していましたが当時の会長が病となり当会の運営も低迷し役員は会を解散を検討するようになりました。令和2年3月の役員会で多くの役員が高齢を理由に会長就任を固辞されましたので次年度の会長に就任しました。私は役員になって「せたかい」（創刊号～10号ガリ刷り）を除いて全巻通読してこの会を残したいと4月から第7代会長として新役員とともに活動した次第です。しかしこの年の2月にコロナが発生しコロナ禍で集会も思うようにできない状態から5年間、次のような活動をしました。

- ・ホームページの開設
- ・毎月の会報の発行・機関誌「せたかい」の71号、72号の発行
- ・コロナ収束にともない講演会を年4回から6回、8回と実施
- ・世田谷の寺社での講演会、扶桑教大司での富士講、満願寺での等々力の歴史など実施しました

5年間の反省と次の時代へ

この5年間の私どもの活動は、講演会の充実で魅力あるサークルにしようとしてきました。

講演会活動の長所は・多彩な講師による新しい学び・学びの質が高まる（質疑応答）・コミュニケーション形成（参加者同士の交流）などが期待されます。しかしその反面、運営側には・講演会の実施には準備に時間と労力がかかる。・コストがかかる。講師謝礼、印刷、会場設営、・参加人数が読みにくく、小人数だと講師に申し訳ない。などあります。

この5年間の運営で講演会の回数は増やしましたが期待した質疑応答も少なく参加者の交流も少なく参加者の数も毎年減っています。構成していた役員も高齢で退会し新たな役員の補充もなく、退会者の増加と新規会員の減少もあり従来の「多彩な講師による聴くだけの講演会」では会がじり貧になると質の転換を決意した次第です。じり貧で会を解散するか、方向転換で次の世代に世田谷区誌研究会の学びの精神を引継げるかの賭けではありますが「声を出して学ぶ論語」の企画をご理解しご支援をお願い申し上げます。

会報については継続する予定です。 1月谷口栄先生講座・2月伊藤寿先生講座よろしく